

< 自然再生協議会情報連絡会議の開催報告 / 主催：環境省自然環境計画課 >

平成19年2月5日、6日の2日間、初めての試みとして情報連絡会議が環境省主催で開催されました。今回は西日本地区の自然再生協議会等の構成員(30名)が山口(榎野川)に参集され、1日目には、きらら浜自然観察公園、榎野川干潟の現地視察、2日目には各協議会から事例発表があり、活発な意見交換等が行われました。当協議会からは中西会長が出席され、榎野川干潟の再生に向けた取り組み等について情報発信を行いました。



連絡会議の様子



現地視察

< 榎野川流域フォーラムの開催概要 >

平成18年度の榎野川流域フォーラムは、第1回が平成18年11月に、第2回が平成19年2月に、県水産研究センター内海研究部で開催されました。

第1回は、事務局より『流域連携活動報告』、山口カブトガニ研究懇話会の原田直宏氏より『山口湾のカブトガニ幼生の生息状況について』、また、特別講演として、瀬戸内海区水産研究所の浜口昌巳室長から、『内湾性藻場・干潟の現況及び再生に向けた戦略』として、アマモやアサリに関する貴重な話が発表され、活発な意見交換が行われました。



瀬戸内水研浜口室長の講演

第2回は、事務局より『検討協議会の活動報告(ワークショップ、源流の碑の建立等)』、錦川流域ネット交流会の白井啓二氏より『錦川流域の連携に向けた取組について』、奥田賢吾氏より『島田川をフィールドとした活動内容について』が発表されました。その後、会場を山口県漁協山口支店に移し、榎野川流域の食材を使った試食会が実施され、メゴチの唐揚げやケンブツジャコを団子にした味噌汁が振る舞われました。



試食会の様子

< 先進地視察報告/横浜市等 >

榎野川干潟の自然再生の取組の参考とするため、産学公の連携・協働により、森川海の自然再生を行っている横浜市等の取組について、市民、行政との意見交換や現地視察を行いました。

月日	視察内容	対応者等
11月31日	海の公園(現地視察) 海とのふれあいセンター(意見交換) 森川海の流域づくりについて(意見交換)	横浜市環境創造局/江口所長 NPO法人 海辺つくり研究会/木村事務局長 横浜市立大学大学院 国際総合科学研究科/林教授
12月1日	神奈川県のアマモ・干潟再生に向けた取り組みについて(意見交換) アマモプレサミット アマモ類自然再生ガイドライン調査検討委員会	神奈川県環境農政部水産課/滝口副技幹 神奈川県水産技術センター/工藤主任研究員 横浜市立大学大学院 国際総合科学研究科/林教授



横浜市海の公園



海とのふれあいセンター意見交換



横浜市立大学での意見交換



神奈川県との意見交換

榎野川河口域・干潟自然再生協議会 ニュースレター

発行日：平成19年3月

発行・編集：榎野川河口域・干潟自然再生協議会 事務局

このニュースレターは、榎野川河口域・干潟自然再生協議会で話し合った内容や自然再生の取り組みの状況などをお知らせするものです。平成18年度の取り組み状況は以下のとおりです。

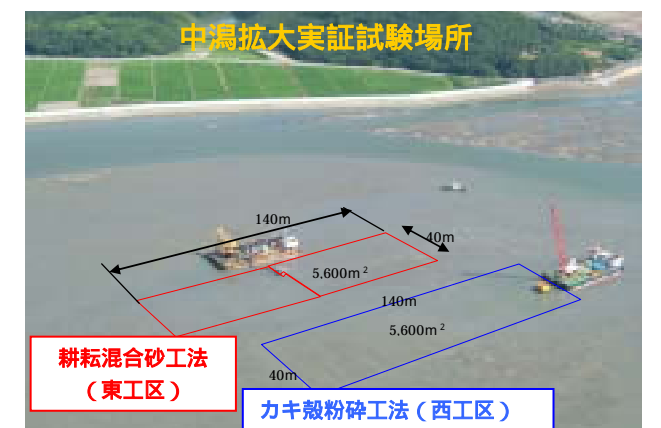
実施日	内容
4月 6日	自然再生協議会<調査研究ワーキンググループ>
27、28日	拡大実証試験のモニタリング(春季：中潟、南潟)
29日	榎野川河口域・干潟自然再生協議会(第1回：通算7回)
29日	干潟耕耘実証試験(竹柵、やま、うね) 干潟観察会(南潟)
5月 26日	干潟モニタリング(南潟)：目視調査(毎月実施) 以下同じ
27日	アマモ観察会(事業説明、種子採取)
28日	自然再生協議会<カブトガニワーキンググループ>
6月 14日	豊かな流域づくり推進委員会(第1回)
7月 15日	海岸(美濃が浜)の清掃活動(榎野川流域活性化交流会)
24~26日	拡大実証試験のモニタリング(夏季：中潟、南潟)
8月 6日	自然再生協議会<カブトガニワーキンググループ>
27日	カブトガニ幼生生息調査<自然再生協議会：カブトガニワーキンググループ>
9月 13日	干潟再生小委員会(第1回)
10月 5~6日	拡大実証試験のモニタリング(秋季：中潟、南潟)
7日	干潟耕耘実証試験(第2回)
11月 19日	榎野川流域フォーラム(第1回)
11月30日~12月1日	干潟関連視察(横浜)
1月 20~21日	拡大実証試験のモニタリング(冬季：中潟、南潟)
31日	干潟再生小委員会(第2回)
2月 5~6日	自然再生協議会情報連絡会議(環境省主催)
10日	榎野川流域フォーラム(第2回)
3月 15日	干潟再生小委員会(第3回)
22日	豊かな流域づくり推進委員会(第2回)

平成18年度10月以降に開催されました関連事業の概要について紹介します。

< 榎野川干潟再生の取り組み >

【中潟での取り組み】

中潟においては、平成17年度に、平成16年度の小規模実証試験の結果を反映し、耕耘混合砂工法とカキ殻粉碎工法の2つの工法により、合計約1.1haの拡大実証試験を行いました(右写真参照)。今回は、施工終了後から、約1年間が経過した平成18年10月までのモニタリング結果を示します。



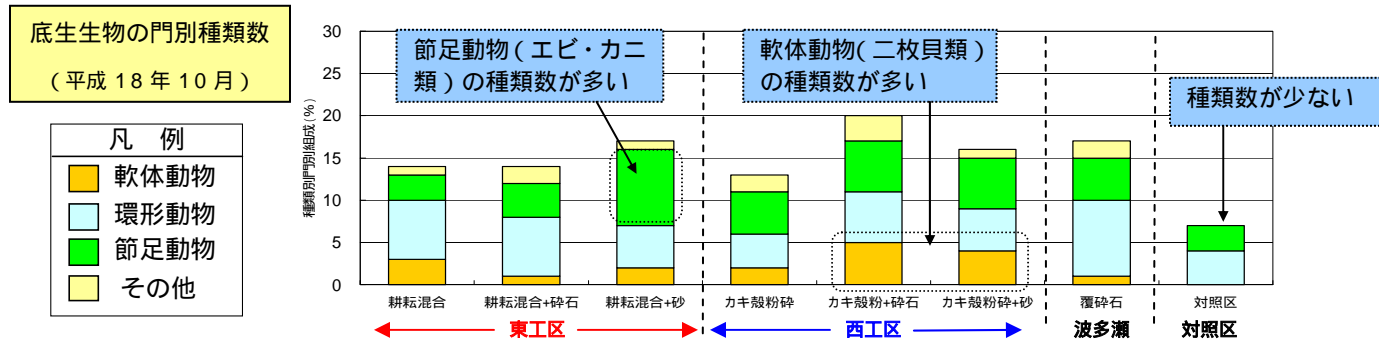
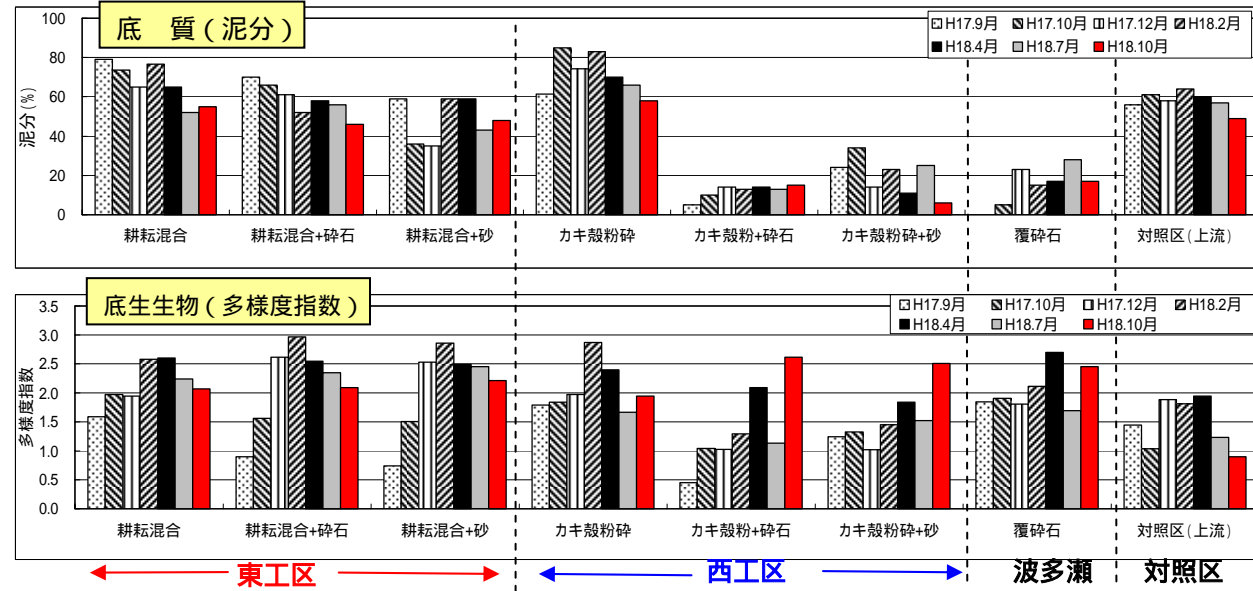
耕耘混合砂工法(東工区)

カキ殻粉碎工法(西工区)

資料の公開方法
協議会で公開された資料及び議事要旨等については、榎野川河口域・干潟自然再生協議会のホームページ(<http://eco.pref.yamaguchi.lg.jp/fushino/index.html>)で公開しています。
ご意見・ご質問等の問い合わせは、事務局(山口県環境生活部環境政策課)に電話、FAX、メールでご連絡ください。
TEL 083-933-2690、FAX 083-933-3049、E-mail a15500@pref.yamaguchi.lg.jp

変化状況のまとめ

項目	結果の概要
底質 (泥分)	覆砂区以外の試験区では当初は泥分が高かったが、徐々に泥分は低下している。一方、覆砂区では覆砂当初の泥分を維持しており、覆砂による底質改善効果が持続していることが確認された。
底生生物 (多様度指数)	底生生物の多様度指数は、対照区と比較して、全般的に高い傾向を示しており、底質改良工法により、干潟生物の多様性が向上している。
底生生物 (門別種類数)	約1年後の門別種類数は、対照区と比較して、耕耘混合砂工法(東工区)では、節足動物のカニやエビ類等が、カキ殻粉碎工法(西工区)では、軟体動物の二枚貝類が多かった。



現時点の中潟拡大実証試験の評価

平成17年度に実施した耕耘混合砂工法(東工区)カキ殻粉碎工法(西工区)2つの工法による底質改善により、干潟生物が多様化し、一定の成果は得られています。しかし、耕耘混合やカキ殻粉碎のみでは、泥分が高い傾向にあり、各工法ともに砕石や砂を混合、覆砂することによって、低い泥分が維持され、生物の多様化、アサリ等の砂浜生物の着底が確認されています。

【南潟での取り組み】

南潟においては、豊かな砂干潟の再生をめざし、二枚貝などに代表される干潟生物の生息環境改善に取り組んでいます。平成18年10月には、春季に引き続き、スコップ等を用いた干潟の耕耘作業が、約100名の参加により行われました。

また、耕耘後には干潟生物の観察会が実施されました。その後、会場を山口県漁協山口支店に移し、同婦人部の協力により、耕耘作業の参加者に、シジミやハモのすり身の味噌汁、アユの塩焼きが振る舞われました。

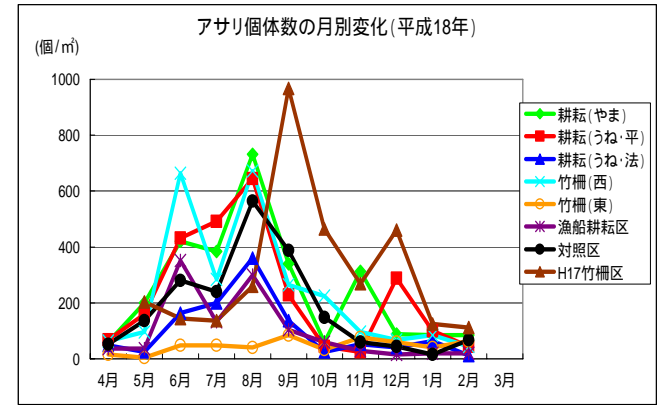


現時点の南潟耕耘実証試験の評価

干潟耕耘を始める前の平成15年度調査では、南潟でのアサリは4~24個体/m²しか確認されていませんでしたが、干潟耕耘などにより個体数の増加が認められています。

耕耘後のアサリの個体数(右図参照)は、5月頃に急激に増加しますが、9月頃から減少傾向を示しました。昨年度と比較すると、やや個体数が多く、また殻長も大きい傾向はみられています。

これまでの結果から、干潟耕耘により、干潟地面下からの有機物の持ち上げ、干潟の柔らかさが適度に図られ、アサリの現存量が数百個体/m²に増加し、一定の成果は得られています。また、これらの取り組みは、アサリなどの二枚貝類等の回復へ向けてのデータ蓄積、住民参加による協働・連携作業による干潟再生の普及に大きな役割を果たしていると考えられます。



< H18 アサリの月別個体数の変化 >

【その他の情報 / きらら自然観察公園のアサリについて】

榎野川河口に位置する『きらら浜自然観察公園』の干潟池では、大型のアサリが生息しています。榎野川干潟でのアサリの生息条件の基礎的な知見を得るため、生息状況の調査を行ったところ、殻長5cm程度の大型のアサリが確認されました。しかし、稚貝はほとんど確認されず、再生産は行われてないようです。他に、シオフキ、ハマグリ、オキシジミの大型のものが確認されました。



< アマモ場造成事業の取り組み >

平成18年5月に漁業者や地域住民との協働により採取したアマモの種子は、水産研究センターで管理した後、11月にガーゼ等にくるんで船上から投入したり、コロイダルシリカと混合し海底に播種(種植)を行いました。1月の調査では、種から実生株の発芽が確認され、今年5月には、アマモ場が形成されると思われます。

